

永池健二著

## 逸脱の唱声 歌謡の精神史

評・三浦 佑之（古代文学研究者  
立正大教授）

早い時間にどこも人けがなくなつて寂しいねえ、先日乗ったタクシーの運転手さんがぼやいていた。たしかに、いつもなら宴会が多くなる季節なのに、繁華街の人出は少なめに

### 社会からの逸脱誘う歌

人々を「△逸脱▽の共同性」に誘うのが酒宴であり、歌＝唱声であると説明されると、我々の宴会やカラオケとも変わりがないと思う。

一方、独りさびしく歌う「鼻歌」は、「中世と近世の境目頃に登場したきわめて新しい用語」らしい。すでに「ひとり歌」という

語は古くからあり、独りで歌を歌うことを古代で

は「うそぶく」と呼んでいた。それは、「眼に見えぬ神霊や靈魂、鳥獣の霊など、この世ならぬ存在に働きかけてその力を喚起したり、退散させたり」する行為だったと著者は言う。さびしい夜道を独りで歩いてみると、だれもが鼻歌を歌いたくなくなってしまふのは、その原義から考えて当然のことだと気づかされる。

旅を歌った歌には地名が出てくることが多い。そこで歌われるのは、内と外との境界に位置する場所が多く、その結界を通過する際に、「一定の手続きを繰り返しながら乗り超え」るための言語的表現、それが地名を詠みこんだ歌だった。一般書とは言いにくいのが、歌とは何か、人はなぜ歌うのかなど、歌うことの意味を考えてみたいという人にはお勧めの、刺激に満ちた好著である。



鳥社  
3000円

みえる。そんな枕を置くのは、興味深い「酒盛り」論を読んだから。

「酒盛」という語が登場するのは中世後半、南北朝から室町時代にかけてのことで、それは酒を飲む行為が神事から離れて独自の楽しみになったことを意味する。そこでは小歌をはじめ、「平家語り、早歌、能の小舞、小謡、乱舞等々」の新興芸能が行われた。室町の歌謡集『閑吟集』の有名な一首「なにせうぞ くすんで 一期は夢よ たゞ狂へ」が人々を誘引する言葉となるには、風流踊りのような集団的舞踊の場や酒盛りが必要だった。隠遁や漂泊が社会からの逸脱の一形式であったように、

◇ながいけ・けんじ 1948年、佐賀県生まれ。奈良教育大教授（日本文学）。著書に『柳田国男 物語作者の肖像』など。